第２分科会　第２分散会　教育課程
確かな学力の育成を目指す教育課程の編成と校長の在り方

研究発表　　子どもたちの今の姿を出発点として、自ら学ぶ力をはぐくむための指導の組織化
－異学年の小集団で学ぶ総合的な学習を通して－

兵庫県　　神戸市立会下山小学校　　近藤　兼利

Ⅰ趣旨

２１世紀を担う子どもたちの生きる力へとつながる自ら学ぶ力の育成が、今、私たちは強く求められている。そのためには、自ら課題を見つけ、自らの方法で考え、判断して、自らの力で解決していく主体的な学習が大切となり、これからの教育の中で不易な部分になっていくであろう。国際化、情報化が著しく進歩し、価値観が混迷化していく中で、自らの判断で主体的に学ぶということは欠かせないものになる。

しかしながら、子どもたちの現実と向かい合う時、「主体的な学び」というものはたやすいことではない。柔らかいベースを持っている子もいれば、そうでない子もいる。

例えば「自ら課題を見つける」ということを考えてみると、大きく分けて、次のような子どもたちの姿が見える。

ア　支援を必要としないでできる子
イ　少しの支援があればできる子
ウ　十分な指導や支援があってはじめてできる子
エ　指導や支援が十分にあってもなかなか困難な子

こうした子どもたちのありのままの姿をしっかり捉えて、それを出発点として、個に応じたきめ細かな指導の充実に努めることが肝要である。そのためには興味、関心、習熟度の応じた少人数指導やティームティーチィグによる指導等が必要になる。また、教職員の研修の充実や学校外の人材の活用を図り指導方法や指導体制を組織化していくことが求められている。

神戸市では、校長会独自の研修会を組織し、校長のリーダーシップの向上を目指している。その中で、昨年度、実践されただいち小学校の「だいちタイム」取り組みを具体事例として上げ、「自ら学ぶ力をはぐくむ指導の組織化」を図るために、校長の在り方として何が必要かを研究していく。

＊＊＊　だいち小学校の概略　＊＊＊

- 平成 14 年４月、二つの学校が統合してできた学校
- 児童数 ６６０名、学級数２1、教員数２７名＜担任以外の加配教員２名（復興担当、新学習シ）＞
- 教育目標「夢　命　心　学びを大切にする子」
- 神戸市で初めてのオープンスペースの施設
- 震災の被害が大きかった地域でその影響が今も残る

Ⅱ研究の概要

１　研究課題

「だいちタイム」（異学年の小集団で学ぶ総合的な学習）の実践を通して指導の組織化を図る

「だいちタイム」とは

◆　一人一人の興味・関心を広げ、自発的な「学び」を体験していく中で、自ら学ぶ力（自ら課題を見付けて解決する力）を高めることを目指す。

◆　各学年で取り組む総合的な学習の時間とは別に、４年生～６年生の子どもたちが小集団で学ぶ総合的な学習の時間とする。

◆　低学年の担任や専科を含むすべての教師が指導・支援を行う。

2　研究計画

（１）基本的な考え

「だいちタイム」の実践にあたって、次の二点を基本的な考えとする。

ア　子どもたちがこれをやりたいという意欲を大切にして、この時間が楽しみと思えるような魅力的な学習活動を展開するにはどうすればよいか。

イ　一人一人の子どもが充実した活動をすると同時に、教師の指導・支援が一人一人の子どもに届くように学習を進めていくにはどうすればよいか。

＜校長の在り方＞

・　教育課程の編成は、その一年間の学校教育を推進する重要な役割を担う。新しい取り組みを計画していく場合は、子どもの実態をしっかり見据えて、全体を見通したうえで、基本的な考えを校長が具体的に示すことが大切である。「だいちタイム」では、上記の二点を基本姿勢として共通理解を図る。

※　指導の組織化のポイント①
　→　基本姿勢の共有化を図ること

（２）子どもの今の姿を出発点として

まず、問題になったことは、自分の活動テーマを自分で見付ける力が子どもたちに十分に育っていないという点である。教師の指導が十分にあっても課題を見つけ

ることが困難な子どもや物事の認知や対人関係に課題を持つ子どもが少なくない。

そこで、子どもたちに取り組んでみたいことについてアンケート調査を行い、それをもとに、教師が指導・支援できる活動を決めて教室を開き、そこに子どもたちが集まってくるという学習形式をとることにする。

＜校長の在り方＞

・　子どもたちの今の姿を正しく捉えるために、委員会の指導主事等に依頼して、学級の子ども一人一人を見てもらい、直接的なアドバイスを担任が受ける研修を行う。また、配慮を要する子どもへの支援を広げるためにボランティアの大学生の派遣を依頼する。

※　指導の組織化　ポイント②

→　子どもたちの今の姿を正しくとらえること

（３）育てたい力

学年で取り組む総合的な学習の時間は、教科から発展した課題を追究することに重点をおいている。しかし、「だいちタイム」では、子どもの興味・関心に重点をおき「自ら学ぶ力」の育成を目指す。そこで、遊び的な要素も活動のテーマとして認めることにする。

＜校長の在り方＞

・　単なる遊びで終わらないために、それぞれの学習活動の段階で、あるいは学習活動全体を通して、総合的な学習のねらいを振り返る。

（ア）課題設定の能力　（イ）問題解決の能力

（ウ）学び方、ものの考え方　（エ）学習への主体的・創造的な態度　（オ）自己の生き方

その達成のためには、

（ア）活動のテーマを決める・選ぶ　（イ）活動の内容や方法を企画し、計画を立てる　（ウ）計画に沿って、調べたり作ったりして、実践する　（エ）活動を振り返りまとめる・発表する・展示する

という学習展開がされることを確認する。

※　指導の組織化　ポイント③

→　学習課題を確認し学習展開を具体化すること（形成的評価につながる）

（４）「ひとり学び」か「グループ学び」か

神戸市初の全学級オープンの教室ということで，教職員に戸惑いがあった。仕切りがなく、隣の授業の声がよく聞こえる教室で、どのような学習を行うかを様々な角度から研修をする。その中で「だいちタイム」については、「ひとり学び」か「グループ学び」かが問題となる。

＜校長の在り方＞

・　教職員の研修を深めるために、総合教育センターの研修室の協力を得て、オープンスペースの活用について研修をする。

・　愛知県緒川小学校の「オープンタイム」（一人一人の子どもが活動テーマを持ち、計画を立ててテーマを追究していく一人学びの時間）を研究する。その発表会に、校内態勢を整えて教職員の３分の１を派遣する。研究会参加者は、それぞれレポートを作成し、各自が考えた具体案を示しながら報告会を開く。

※　指導の組織化　ポイント④

→外からの刺激を導入して活性化を図ること

こうした研修を土台として子どもの学びの姿を話し合う。異学年の小集団での学習ということが決まった時点で、「だいちタイム」は、緒川小学校の「オープンタイム」のような「ひとり学び」だけの時間ではなく、「グループでの学び」も含まれる時間となる。

今後、ある程度のスパンをもって、「ひとり学び」の学習になることを目指していくが、今の段階では、自ら学ぶ力の基礎を育てることを目指す。

（５）時程と支援者

教師の指導･支援が一人一人の子どもに届くように学習を進めていくためには、ひとりの教師が受けもつ子どもの数が少ない方がよい。そこで、低学年の担任や専科も含めてすべての教師が指導・支援に当たれるよう、時程を次のように設定する。

◇　水曜日の５校時を７５分とする（５モジュール）

◇　１年間の前期を「クラブ活動」、後期を「だいちタイム」とする。

クラブ活動と同じ時間帯で活動すること、また、学ぶ力の差や少人数の指導を考慮して、３年生の参加は見送り、４～６年生の活動とする。それにより、ひとりの教師が指導・支援する子どもの数が平均１２名という小集団での学習活動が可能になる。なお、英語や PC、演劇等でゲストティチャーの協力を得る。

＜校長の在り方＞

・　継続的な取り組みができるためには､時間に無理のないことが大切である。水曜日の５時間目が、２モジュール時間数が増えたが、それにより､金曜日の６時間目から週２～３回の余裕時間ができ、学年打合せの時間が十分確保できるようになる。

※　指導の組織化　ポイント⑤

→　合理的な活動の時間を工夫すること

・　指導や支援の充実のためにＰＴＡや地域諸団体へ声をかけて、ゲストティチャーのネットワークを広げる。領域や区の校長会等でゲストティチャー情報の共有化を心がける。

※ 指導の組織化　ポイント⑥

→　指導、支援者のゆとりを配慮すること

３　実践に向けて

（１）子どもへのアンケート調査（６月）

総合的な学習の経験を積んできている５・６年生に、取り組んでみたい活動のテーマについてアンケート調査を行う。そして、子どもたちが考えた活動テーマを２５に分類する。そのなかには、実現不可能なテーマや将来の「ひとり学び」につながりにくい活動もいくつか含まれていた。

＜校長の在り方＞

・　日頃の子どもたちの姿から、自分のやりたいことや興味、関心のみのアンケートでは、、サッカーや卓球等のスポーツ的な活動を多くが希望することが予想される。そこでは、集団での動きや繰り返しの練習が中心となり、自ら学ぶという目指すものと微妙にズレるところがある。また、クラブ活動と明確に区別することからも、今年度はスポーツ的な活動は外すことにする。

※　指導の組織化　ポイント⑦

→　一定の枠の設定は必要であること

（２）教師へのアンケート調査（７月）

子どもへのアンケートの結果をもとに、一人一人の教師が指導・支援できる活動を２つ選び、それを調整して開く教室を決定する。その際、子どもの興味・関心を広げるために、教師が自分の趣味や特技を生かして新たな教室を提案することもできることとする。こうして、子どもの考えた活動テーマにプラスマイナスして、ひとまず２４のプランを作ることになる。

＜校長の在り方＞

・　教職員も、自分の得意とする分野においては、自信を持ち意欲的に取り組むことができる。そこを大切にして、教職員の得意分野を活用しながら、子どもの意欲につなげていくことも肝要である。

※　指導の組織化　ポイント⑧

→　教職員の得意分野を活用すること

（３）モデルプランの作成（７・８月）

夏季休業中に、それぞれの教師が、自分の開く教室について、活動名、活動内容、主な活動場所、使用する道具や用具、費用、他に協力を依頼すること、オリエンテーションで子どもに知らせる活動紹介文等について案をまとめ、具体化に向けてモデルプランを作成する。

８月の終わりには、そのプランを持ち寄り、「だいちタイム」を進めていくうえで問題になりそうなことについて話し合う。

＜校長の在り方＞

・　初めての取り組みであり、具体的な活動が描きにくく、各自それぞれの姿を思い浮かべていつ感がある。そこで、モデルプランを持ち寄り意見交換をすることによって活動のイメージ化を図る。

※　指導の組織化　ポイント⑨

→　活動のイメージ化を図ること

（４）問題点の話合い（９月）

ア　活動場所の明確化

緊急の場合に備え、子どもがどこで活動していかを明らかにするために、エレベーターホールにお知らせボードを作ることにする。活動場所のほか、活動予定や持ち物などを書くスペースも作り、担当者と子どもたちとの連絡ボードとしても活用する。また、校外へ出て活動するときには、校外学習届を出すことに決める。

イ　活動場所・教具などの重なり

モデルプランができた時点で、活動場所や教具などに重なりはないか調べる。すると、デジタルカメラやコンピュータの使用に関して、台数が不足する可能性がでてきた。そこで、常時これらを使って活動する教室の使用を優先させたり、ふたりで１台を使うようにしたりして、配当計画を立てる。

ウ　活動の記録と評価

学習活動を深めていくために、ふりかえりシートを書かせることにし、その内容について話し合う。時間ごとに活動の予定や感想、満足度、次回の計画、担当の教師やともに活動した子どもたちがアドバイスを書く欄などを設ける。また、すべての活動が終了した後、担当者が観点を決めて評価を行うことにする。

－　評価の例　－

年　　組（　○○　○○　）

活動名	観点	評価
カメラ de アート	（　）課題設定の能力 （○）問題解決の能力 （　）学び方、ものの考え方 （○）学習への主体的、創造的な態度 （　）自己の生き方 ＜その活動特有の観点があればそれを書く＞	自分の撮影したい写真に合わせて、撮影場所を考えたり、オブジェを工夫したりして、熱心に活動しました。

＜校長の在り方＞

・　学び方を学ぶためにも、形成的評価のためにも、活動の記録や評価を常に行うことは大切である。教職員の実態が「記録より記憶」であることを反省して、記録の日常化を図る

※　指導の組織化　ポイント⑩

→　記録の日常化を図ること（形成的評価）

（５）オリエンテーションとグルーピング（１０月）

１０月初め、４年生～６年生を一同に集めて、「だいちタイム」のねらいや教室の概要についてオリエンテーションを行う。その後、やってみたい教室を３つ選び、子どもの意思を尊重しながら、グループ分けを行う。教室数２２で、１教室は６名～１５名で最終決定をする。

＜校長の在り方＞

・　６ヶ月の準備期間を経て、具体的な取り組みがスタートする。子どもたちの興味や関心、意欲をより高めるために、全体でのオリエンテーションとグループ作りには十分な配慮をする。

※　指導の組織化　ポイント⑪

→　グルーピングには細心の配慮をすること

４具体的な活動例

（１）だいち演劇団　主な活動の概要

＜学習段階１＞

ミュージカル、演劇について知る

この活動を選んだ動機の話合いをする。活動について見通しをもち、計画を立てる。ビデオ視聴・ＢＧＭの効果についての実験・滑舌よく話すための早口言葉などを行う。

＜学習段階２＞

作品を選ぶ

３本の脚本から「風の子守唄」に決定する。滑舌練習・表情を伝えるゲームをする。

劇団員のゲストティーチャーによる演劇講座

発声法･演劇をするための心がけについてなどをプロから学ぶ。

キャストの決定と役割分担

脚本の読合せ後、希望でキャストを決定する。その他の役割も分担する。

＜学習段階３＞

グループ練習

各グループに分かれて部分的な練習をした後、全体で歌の練習をする。

通し練習とグループ練習

脚本を持ったまま立ち位置につき、通して、舞台全体のイメージをつかむ。グループごとに、より具体的に練習や準備をする。

通し練習とグループ打ち合わせ

効果音、小道具もつけて演じてみる。脚本をもたなくても、歌、せりふが言えるようにする。会場、発表方法を決定する。

＜学習段階４＞

通し練習

実際に会場となる場所で練習する。効果音、小道具、衣装も用意して、本番に近づけていく。公演のポスターやチラシなど、宣伝活動について話し合う。

リハーサル

本番通りに通し練習をする。音楽をかけるタイミングなどを確認する。サブの先生の協力を得てビデオに撮り、反省に生かす。公演日は２月２７日に決定。

（２）だいちタイムを振り返って〔担当者から〕

「えっ、今日はもう終わりなの。」「もう少し待って。」７５分が瞬く間に過ぎてしまい、子どもたちからよく聞かれた声である。

・　自分の興味、関心に中心をおいた教室形式が、今の段階では子どもたちに合っていたこと

・　少人数の学習活動にこだわったので一人一人の子どもに教師の指導・支援が行き届いたこと

・　担当の教師が自分の得意分野をいかして、子どもたちと一緒に楽しみながら取り組めたこと

これらの成果といってよいであろう。

Ａ君は、クラブ活動で調理をしていたときは、グループの友達にまかせて、なんとなく参加していただけの子であった。しかし、「だいちタイム」の「体によいおやつ」の教室では、担当教師の細かい支援が可能となり、自分で作るという主体的な活動ができた。一生懸命レシピを読み、材料をていねいに量る。額に汗を浮かべながら火加減を調節する。そして、おやつの完成。後片付けまでがんばる姿は新しい発見であった。

Ⅲ　まとめ

「だいちタイム」を具体事例として、自ら学ぶ力を高めるための指導の組織化がどうあるべきかを考えてみた。

①基本姿勢の共有化　②子どもの実態の掌握　③課題の明確化　④外からの刺激の導入　⑤時間の合理性　⑥指導者のゆとり　⑦一定の枠の設定　⑧教職員の得意分野の活用　⑨活動のイメージ化　⑩記憶より記録（形成的評価）　⑪グルーピングの配慮　等のポイントを挙げたが、まだまだ必要な観点があるであろう。

ともあれ、校長がリーダーシップを発揮して、指導の組織化を図るには、

○　子どもの今ある姿を出発点として、目指す子ども像を明確にすること。

○　今ある教職員の個々の力量を、また、その横の連携をしっかり掌握しておくこと。

○　保護者が子どもへ願っているもの、地域が学校へ期待しているものを掌握しておくこと

○　学校の施設・設備を十分に考慮した内容であること

こうしたことが有機的につながっていくことが大切である。子どもたち自身、そして、それを取り巻く様々な現実をしっかり見据えて、自ら学ぶ力をより大きなものにし、２１世紀を担う子どもたちの生きる力の育成を目指していきたい。